

平和博物館：その定義と類別化に関する若干の考察

坪 井 主 税

はじめに—問題の提起

平和博物館 (peace museums) は混乱している。平和博物館とは何なのかが、分からなくなってきた。例えばここに、平和博物館を紹介している4つの出版物—1は『世界の平和博物館』^{注1)}、2は『平和博物館・戦争資料館ガイドブック』^{注2)}、3は上記2冊の誘因となった1992年英国ブラッドフォード大学平和学部で開催された世界の平和博物館・反戦博物館および関連施設の館長および担当者集会 (Meeting of Directors and Staff of Peace and Anti-War Museums and Related Institutions Worldwide)、通称、第1回平和博物館国際会議 (First International Conference of Peace Museums)^{注3)}の報告書 *Bringing Peace To People* (『平和を我々の手に取り戻す』)^{注4)}、そして、UNESCO (Paris) の *Peace Museums Worldwide* (『世界の平和博物館名鑑』)^{注5)}—を並べてみる。これらは、互いに重複して紹介しているとはいえ、平和博物館が国内外に相当数あることを教えてくれる。だが、平和博物館とは何かについては、はっきりとは教えてくれない。そればかりではない。いくつかの疑問を生じさせる。第1に、なぜ (オーストリア) 国際 에스ぺラント博物館 (『世界の平和博物館』p. 227) が平和博物館なのか。第2に、『世界の平和博物館』・『平和博物館・戦争資料館ガイドブック』は (ポーランド) 国立オシヴィエンチム博物館 (通称「アウシュヴィッツ国立博物館」) を平和博物館としているのに、*Peace Museums Worldwide* はなぜ平和博物館として扱っていないのか。第3に、(英) 大英帝国戦争博物館 (The Imperial War Museum) が平和博物館として扱われているが (*Peace Museums Worldwide* p. 51)、これはどういうことか。また、*Bringing Peace To People* も「戦争記念館・戦争博物館のなかには平和博物館として見なされものがある (同書 p. 38, 原文: at least some of which (すなわち, war memorials and war museums 筆者注) can be regarded as constituting peace museums)」と説明しているが、これはどういうことか。大英帝国戦争博物館は、「1940年の(独)ブリッツ戦闘機によるロンドン空襲を体験するコーナー (The Blitz Experience)」などもあるにはあるけれども、大半は、館入口の巨大な2門の大砲が象徴するように、兵器の展示場であり、兵士の‘栄光’を称える博物館である^{注6)}。英国人さえ、そう思っている^{注7)}。こうした戦

争博物館さえも平和博物館とするなら、一体平和博物館とは何なのか。平和博物館がその影響を最も強く及ぼすべきであろう市井の人々に、分かるはずがない。

Peace Museums Worldwide の編集責任者 ^{ウルズラ マリア ルーザー} Ursula-Maria Ruser は、同書まえがきで、同書の不首尾の理由として次の3点を挙げている—(1)平和博物館に対する認識が一定していないこと、(2)平和博物館の定義がないこと、そして、したがって、(3)平和博物館の類別化ができないこと。ルーザーは、同書出版直後にオーストリア・ウィーン郊外のシュライニングで開催された第2回平和博物館国際会議^{注8)}で、こうも言っている—「平和博物館の定義を決める時期がきている。そうしないと、個々のすばらしい博物館の活動がただの点で終わってしまう。今必要なのは、点を線にすること。そのためには、共通の目的を持って働いていることを確認し合える平和博物館の定義を決めなくてはならない(要旨)。」^{注9)} 定義は、同会議では決まらず、次回すなわち本年11月大阪国際平和センターと立命館大学国際平和ミュージアムを中心に開催される第3回平和博物館国際会議に持ち越されることになった。にもかかわらず、同会議前の現在(1998年7月)、第2回の成果として誕生した平和博物館国際ネットワーク事務局(International Board of Peace Museums)^{注10)}をニューヨーク国連の広報局と関わりを持つ NGO (Non-Governmental Organization, 非政府組織)に発展させて、平和博物館を国際化する試みがすでに進行しているという^{注11)}。各国にある平和博物館すべてに通底する定義—すなわち、国際社会の中で、アメリカでクリックしようが、イラクでクリックしようが、インドやパキスタンでクリックしようが、日本の広島や長崎でクリックしようが、インターネット画面に出てくるのはみな同じという平和博物館の定義—を有する ^{インターナショナル} International NGO になるか、それとも現状のまま、個々別々、各地に点として存在し、必要に応じて情報交換し合う程度の平和博物館に留まるか。平和博物館は今、岐路に立っている。本稿は、もちろん前者の道を選択すべしと思う筆者の、平和博物館の定義および類別化に関する若干の考えを述べるものである。

1 定義

これまでいくつかの定義がなされてきた。その1つは、1983年日本で初めて「平和博物館」なる言葉を使った平和博物館を創る会の定義：「いわゆる平和と戦争に関する諸資料・諸情報を集積し、それらの展示・一般利用を図る施設」^{注12)}。そして、1993年の欧州平和研究学会(European Peace Research Association)平和教育部会の(試的)定義：「平和博物館とは、平和に関する歴史的展望を与え、かつ、平和教育に資する目的を持って一般公開する系統立った展示物を有する施設(原文：A peace museum is a systematic collection of artefacts displayed to the general public to give a historical perspective on peace and to serve the purpose of peace education)」^{注13)}。筆者は、この両者に対して不満である。前者に対する不満は、この定義が平和博物館という建物についてなされている点にある。平和博物館は、それ自体は建物であるけれども、実質は、その器を設立した者・運営している者がその平和に対する思いを来館者に伝え

ていく運動なのである。運動であるならば、その目的、すなわち、どんな平和を勝ち取ろうとしているのかを明らかにしなければならない。もし、この定義のまま出来上がった建物があるとするれば、それは、通常の歴史博物館であって、価値選択を伴う「平和」博物館ではない。後者の定義も同じである。定義中の「平和」がどんな平和なのか、「戦争の不在」なのか、「平和感情」なのか、あるいは別の「平和」なのか、それが明確ではない。ある国ある国民にとっては、強力な武器・軍隊をして他国・他国民を抹殺することが「平和」である場合もある。

第2回平和博物館国際会議時の立命館大学国際平和ミュージアム館長安斎育郎の定義：「平和的価値を広めることを目的とし、そのような社会的機能を果たしている（施設、筆者注）」が難解だったのは、「平和的価値」という平和学用語の難しさもさることながら、前二者と同じように、運動として求める平和がはっきりと見えなかったことにあった^{注14}。このことはまた、世界で一番数が多く、一番活発な活動を展開している日本の平和博物館の大部分にも当てはまる。例えば平和博物館会議^{注15}を構成している7館—通称原爆資料館と呼ばれる広島平和記念資料館や長崎国際文化会館、沖縄県立平和祈念資料館、大阪国際平和センター、立命館大学国際平和ミュージアム、川崎市平和館そして埼玉県平和資料館—の場合、その自らの地が経験した被爆や空襲あるいは戦闘行為、そしてそこから生じた悲惨な体験の写真や記録、戦時の生活や被害・加害に関する歴史的資料などを見せた後、どんな平和を勝ち取ろうと来館者に訴えているか。そこにはただ、「恒久平和」・「平和の尊さ」・「未来の平和」・「平和の希求」・「平和な社会」など抽象的な言葉があるだけで、具体的にはどんな平和なのかが分からない。

では、定義を規定する平和博物館が求めるべき平和とは何か。「平和」という言葉を解剖しながら、求めてみよう。

そもそも「平和」は、その定義一つとっても、複雑で、「戦争の不在（消極的平和）のみならず、内部の紛争、不正、暴虐などの構造的暴力が克服された状態（積極的平和）」という定義（Johan Galtung, 1969）がもっとも人口に膾炙^{かいしゃ}している。けれども、それも必ずしも確定しているわけではない^{注16}。確定しているのは、いずれの定義をとるにしても、平和は、祈念していれば神がこの世に与えてくれるものではなく、今生きている人間が他の人間と手を携えて、もう一方の平和を崩す人間との闘いの中で、努力して勝ち取るものだということである。しかしまた、この「平和の勝ち取り方」においても、「平和」の複雑さが宿っていて、一方に、武器という暴力手段を使って勝ち取る平和(armed peace)や、古くは冷戦時代、新しくは最近のインドとパキスタン両国の核所有に象徴される双方の所有武器の均衡によって保つ平和(peace through deterrence)があり、他方に、調停や和解、国際法による規制などの平和的手段によって勝ち取る平和(peace through peaceful means)がある。一般的に、世界中の国や国民は前者の平和をとり、後者の平和は、一部の国や非政府組織や個人がとっている。ちなみに先のウルズラ・マリア ルーザーのいる国連は、両者のせめぎ合いの場と言えるかもしれない。前者の平和は、あながち、悪いものとは言いきれない。現に、ヒトラーの引き起こした世界侵略

に武器をもって対抗し勝利したレジスタンスの人々や連合国の行為を、称えこそすれ、否定する者はいないし、それにまた、アジア侵略を企てた日本に対して完膚なきまでに武力攻撃をしたアメリカを悪人と罵る者はいない。そればかりではない。特にアジア人の場合、おそらくは日本の武力侵略に苦しめられ、自由を奪われ、人権を犯された辛い経験がそう言わせるのであろうが、あの筆舌に尽くし難い被害を広島・長崎にもたらしたアメリカの原爆投下さえ、アジアに平和をもたらした行為とさえ言う人もいる。しかし、この方法で勝ち取った平和は一般的に、脆く、崩れ易い。「平和を勝ち取られた側」に怨念や復讐心を残し、それがもとで再び戦いになる場合があるからである。これに比べて平和的手段による平和は、勝ち取った平和の永続性が期待できる。なぜなら、この平和には勝者もいなければ敗者もないし、何より、やがて怨念や復讐心を呼び起こす破壊や戦場での殺人行為を伴わないからである。しかしこの平和は、時間がかかる。新生南アフリカの場合、旧南アフリカの白人政権下で虐げられた黒人が今日のように解放されるのに150年もかかったし、アメリカの黒人が公民権を獲得するのに100年もかかった。武器による平和か平和的手段による平和か、われわれは、紛争が必然の人間社会にいる限り、どちらかを選択しなければならない。二者択一であって、第3の、すなわち、漠然とした平和の勝ち取り方はないのである。したがって平和博物館は、その置かれた国・地域の条件に最も適合する方法で、国際語エスペラントをはじめ戦争、人権や差別、環境や芸術などの展示物と諸活動を通して来館者に、意識的に、平和的手段による平和の価値や可能性を知らしめ、その実現のために共に働くことを呼びかけなければならない。

1980年世界で初めて平和博物館を名乗った(独)リンダウ平和博物館(独 Friedensmuseum, Lindau; 英 The Peace Museum, Lindau)は、スイス、オーストリア、フランスと国境を接するコンスタンツ湖畔の景勝地リンダウの中世のサロンを思わせる建物の中に約100人の宗教、人権、人道主義そして平和手段による平和の分野で活躍した人物の写真と絵と短い説明文を置くことを通して、これを実践している^{注17)}。設立者^{トマス ヴェッチ} Thomas Wechs は、その求める平和は平和手段による平和であることを、慎ましくこう語っている—「わが館の目的は、平和や正義、和解といったものがどれほど人々の生活に影響し、心を突くものであるかを来館者に認識してもらうことです」。^{注18)}(独)レマーゲンの橋平和博物館(独 Friedensmuseum Brücke von Remagen; 英 The Peace Museum 'Bridge At Remagen')は、1980年開館時はレマーゲンの橋記念館(memorial)と名乗った典型的な戦場記念館であったのだが、1992年の第1回平和博物館国際会議に招かれたのを機に平和博物館と改名し、現在、かつての米兵とかつての捕虜だった独兵を引き合わせるといふ平和的手段の1つ、和解活動を実践している^{注19)}。ウルズラ・マリア ルーザーの国際連盟博物館は、国際連盟時代の不戦条約の成立に尽力したケロッグやブリアン、反戦活動家で小説家そしてノーベル平和賞を授与されたベルタ フォン ズツナーをはじめとした女性反戦活動家たちの業績や人生、考え方をいかにも堅牢で立派な、しかし一般には容易に入れない国連の建物から本やパネルにして巡回展示している。武器による平和をとる者達が歴史的な

戦闘行為や英雄的な軍人を賛美する施設を戦争記念館・戦争博物館と言うなら、平和的手段による平和のために努力した人やその行為を賛美する平和博物館を作ろうではないか^{注20)}、と言って1981年開館した(米)シカゴ平和博物館(The Peace Museum, Chicago)の場合は、非暴力手段による紛争解決の方法を来館した子供達に教える活動と同時に、非暴力手段による反戦活動を称える展示、例えば、ジョーン バエズやジョン レノンなどポピュラー、フォーク歌手の反戦歌をヘッドホーンで聞かせ、直筆の楽譜を見せる「平和にチャンスを与えよ(Give Peace ^{ギブ ピース} A Chance)展」、600枚の「ヴェトナム反戦画展」、広島・長崎の被爆者がその体験を描いた「却火を見た(Unforgettable Fire)展」そして非暴力手段による反戦運動や社会改革運動を象徴する「旗、バッヂ、キルト展」などを行っている。開設当時のスタッフで、後、館長を1989年まで務めた ^{マリアンヌ フィルビン} Marianne Philbin は「平和主義(pacifism)は消極的なものではない。(平和的手段による)平和は、腕を拱いていて得られるものではない、努力して勝ち取らなければならないものなのだ(原文: Pacifism is not passive. Peace is something that must be worked for, not waited for.)」^{注21)}と力強く、平和的手段による平和をとる立場を語っている。このシカゴ平和博物館の大成功を収めた「平和にチャンス展」からその名をとり、第1回平和博物館国際会議を主催した(英)公益団体 Give Peace A Chance のブラッドフォード平和博物館(The Bradford Peace Museum) —完成途次ではあるが—は、ノーベル平和賞受賞者南アフリカのデスモンド ツツ大司教に支援され、欧州地域開発基金から36,500ポンドの補助を受け、ブラッドフォード市から供与された建物の中で、子供達への非暴力手段による紛争解決教室などをすでに始めている^{注22)}。1996年7月オランダ・ハーグの国際司法裁判所で「核兵器の違法性に関する法廷」を開かせた世界中の360万署名の束は、今ここにある。同博物館のガイド冊子(*Open the doors to The Peace Museum*, 日付なし)には、明瞭に、この館の目的と勝ち取るべき平和が記されている—「この平和博物館の目的は、すべての老若男女がその人生に起きてくる紛争に際して、非暴力手段による解決方法を求め・実践するよう奨励することである(原文: The Peace Museum aims to inspire and motivate people of all ages to explore and put into practice nonviolent methods of resolving conflict in their own lives.)」、そして、「人間の平和的手段による平和への闘いは、ドラマとヒロイズムに満ちた一つの歴史である(原文: Humankind's striving for peace through peaceful means is a history filled with drama and heroism.)」。この言葉どおり博物館は、ブラッドフォード在住市民のドラマとヒロイズムに満ちた平和的手段による平和の闘いを手記集 *City of Peace, Bradford Stories* (『平和都市ブラッドフォード物語』)^{注23)}として編み刊行した。

これら欧米の平和博物館は、第1回平和博物館国際会議の中で「アウシュヴィッツ」など戦争の恐怖を展示する博物館に対して躊躇^{ためらい}の感情を表したことがある—「われわれのめざす平和博物館は、戦争の恐怖を展示するものでもなく、単なる反戦博物館でもなく、それらを越えるもの」^{注24)}と。Peace Museums Worldwide が「アウシュヴィッツ」を保留した理由はここにあ

ったのである。だが、この反戦博物館でもあり恐怖の博物館でもある「アウシュヴィッツ」は、これら欧米の平和博物館と同じように、否、実際はもっと強烈に、平和的手段による平和を求めている博物館なのである。1991年9月大阪国際平和センター主催の世界平和ミュージアム交流会議に出席した「アウシュヴィッツ」の館長を25年務めたJerzy Wroblewskiは淡々と、しかし、見事にこう言っている—「おそらく博物館を訪れる動機は、人格が皆違うように千差万別でしょう…そこで私たちは人々のこの関心を発展させるために、つまり、来訪者が自覚的な平和の擁護者になるように、また、ここで見た戦争の残虐性の痕跡が彼らに攻撃性や報復心を起こさず、どんなに困難なことでも平和的解決を図ることのみが正しい行為であると自覚させるようにするには、何をすべきか、どうすべきかとの問いを自らに課してみるのです（財団法人大阪国際平和センター『世界平和ミュージアム交流会議報告書』pp.21-22, 1991年12月発行、引用部分の英語なし、下線筆者）。同館長はまた、来館者には漠然とした平和ではなく、明確な意味を持った平和を示す必要性について、十数人ないし数十人のドイツの青年グループの場合を例にとって、こう続けている—「このグループは罪をつぐない、そして平和のために貢献することに全力を傾けているのです…自分と歴史的事実との関係を表明したい、“アウシュヴィッツへの気持ちを表現したい”と思っている人々です。彼らは博物館に数日間通い、そこで本や歴史資料から学び、また清掃などの肉体労働をしています。また、博物館の学術研究員や旧囚人たちとも会います。彼らはすべてのことを現場で学び、真実を知ろうとするのです…彼らがアウシュヴィッツに滞在し、彼らを苦悩させるさまざまな問題への答えを見つけた結果、以前よりももっと良い世界市民になるのではないのでしょうか。また、彼らにとって「平和」とは、さまざまな機会に繰り返しいわれる空虚な言葉ではなく、内容と求める意味を有し、若い世代の目的となるものを多くもった言葉となるのではないか…（同前、p.22）」。

日本の平和博物館は、東京都中野区平和資料館建設構想懇談会の報告（西田勝・平和研究室「非核ネットワーク通信」第32号、1996年6月15日）：「憲法擁護を掲げる中野区としては、平和的手段による平和の達成を求め…」と同じように、明確に求める平和の内容を言うべきである。もし、日本の平和博物館が、「われわれが「恒久平和」・「平和の貴さ」と言えばそれは平和的手段による平和に決まっている」と言うなら、われわれはもう一度われわれ日本人の身の回りを見てみなければならない。自衛隊という軍隊は存在し、米軍の手足となって働いている。沖縄をはじめ日本中に米軍・自衛隊の基地がある。中野区の言う日本国憲法の精神—すなわち前文と第9条に裏打ちされた日本の非武装、戦争への不参加、平和的手段による紛争の解決など—は、ほとんど歴史の脚注に追いやられている。そしてこの状況を支えているのは、博物館に来る人々であるかもしれないではないか。その来館者に「恒久平和」・「平和の貴さ」と言うだけでは、彼らの耳には、「アウシュヴィッツ」が言うように、空虚に響くだけではなからうか。

かくして筆者は、「平和博物館とは、（多様な）系統立った展示物の一般公開とその他の諸活動を通して、平和的手段による平和（の価値、可能性、そしてその達成を）啓蒙する施設（・博

博物館）である」という定義を提起する次第である。

2 類別化

平和博物館の類別化は、平和博物館運動をより推進させるために必要なことである。なぜなら、類別化することによって、個々の平和博物館が、他と同じ目的に沿って働きながらもその中で自らの位置・特性—アプローチとかアイデンティティーと言ってもよい—を確認できるし、また、他のそれを知ることによって、自らの更なる改善に繋^{つな}げることもできるようになるからである。外部者—すなわち、来館者や一般市井の人そして国際社会—にとっても、平和博物館が類別化されていれば、どの平和博物館がどんなアプローチで平和的手段による平和の啓蒙に取り組んでいるかが一目で分かるという便利さがある。類別化の作業はしたがって、この2つの要素—各平和博物館のアプローチが明確に示めされること、そして、それが外部者に誤解や疑問なく伝わること—を織り込んだ形で行われなくてはならない。

この線に沿って、試みに、前章で登場した平和博物館—ただし、疑問を残した大英帝国戦争博物館を一時保留して—を手順を追って類別化してみよう。

まず、前章で登場した平和博物館を確認すると、次のとおりであった：

- (オーストリア) 国際エスペラント博物館
- (ポーランド) 「アウシュヴィッツ」
- (日 本) 平和博物館会議を構成する7館：広島平和記念資料館、長崎国際文化会館、沖縄県立平和祈念資料館、大阪国際平和センター、立命館大学国際平和ミュージアム、川崎市平和館、埼玉県平和資料館
- (独) リンダウ平和博物館
- (独) レマーゲンの橋平和博物館
- (スイス) 国際連盟博物館
- (米) シカゴ平和博物館
- (英) ブラッドフォード平和博物館

次に、これらのうち同類と思われるものを一括し、それらが代表するアプローチを書き、さらに、そのアプローチを踏まえた上で筆者が提起する類別項目の文言(下表中、下線部)を入れてみると、こうなる：

館 名	ア プ ロ ー チ	類 別 項 目 名
国際エスペラント博物館	文化、芸術、博愛・人道主義、庭・その他のスペースなどを通して平和的手段による平和を啓蒙する	<u>その他の平和的手段による平和のための施設</u> (ただし、小項目に左の各分野を置く)
・「アウシュヴィッツ」 ・広島平和記念資料館 ・長崎国際文化会館	人類への警告的な戦争遺物の展示を通して平和的手段による平和を啓蒙する	<u>平和的手段による平和のための戦争遺物</u>
・沖縄県平和祈念資料館 ・大阪国際平和センター ・立命館大学国際平和ミュージアム ・川崎市平和館 ・埼玉県平和資料館	戦争展示を通して平和的手段による平和を啓蒙する	<u>平和的手段による平和のための反戦博物館あるいは反戦・平和博物館あるいは戦争と平和博物館</u>
・リンダウ平和博物館 ・レマーゲンの橋平和博物館 ・国際連盟博物館 ・シカゴ平和博物館 ・ブラッドフォード平和博物館	平和的手段そのものの教育活動(例、紛争の非暴力手段による解決セミナーや和解)を展開したり、平和的手段による平和のために努力した人々の行為・考え方、あるいは、国家間の紛争や戦争を防止するために成立した国際法などを展示したりして、平和的手段による平和を啓蒙する	<u>平和博物館</u>

筆者はここで、2点につき、説明しておかなければならない。その第1点は、本稿がこれまで疑問を呈してきた大英帝国戦争博物館やその他の戦争博物館をどうするかということであり、そして第2は、なぜ日本の多くの博物館を「反戦博物館（ないしは「反戦・平和博物館」，ないしは「戦争と平和博物館」）と類別したかということである。

大英帝国戦争博物館はなぜ平和博物館として扱われたのか。その背景には、第1回平和博物館国際会議に個人の資格でオブザーバー参加した大英帝国戦争博物館の展示担当者の報告があるのである：「同館の展示は、単に兵器や軍人の栄光に関するものばかりではなく、平和的手段で戦争に反対した者、すなわち、良心的参戦拒否者（コンシエンシャス オブジェクターズ シーオーズ Conscientious Objectors, COs）を展示したりその声をテープで聞かせたりという「平和の側面（原文：peace aspect）」もある。近い将来、ホロコースト展を予定している（要旨、筆者）」^{注25)}。この報告を受けて、同会議報告書 *Bringing Peace To People* が「戦争記念館・戦争博物館のなかには、平和博物館と見なされるものがある」とし、そしてこれを踏襲した *Peace Museums Worldwide* が大英帝国戦争博物館を平和博物館としたのである。この大英帝国戦争博物館の例が示すように、館創設当初の目的は兵器と軍人の栄光を展示することであっても、時代と共にそれが薄まって、今日の展示担当者による実験的な「平和博物館的展示」が可能になっている戦争記念館や戦争博物館は、平和博物館運動の広がりという点からはこれらを包容し、類別の点からは、設置者の目的に変更が生ずるまで、上表類別項目「その他の平和的手段による平和のための施設」の新設小項目「部分的に平和的手段による平和を展示する戦争記念館・戦争博物館」に置くべきであると筆者は考える。もし仮に、当初から平和的手段による平和の啓蒙を目的とした戦争記念館や戦争博物館があるとすれば、それは当然、日本の大部分の平和博物館と同じ「平和的手段による平和のための反戦博物館」に類別される。だが通常、戦争記念館や戦争博物館はそのような目的で建てられていない。にもかかわらず、そこに戦争展示があるからと言って、いたずらにそれを日本の平和博物館と同類視することは戒めなければならない。

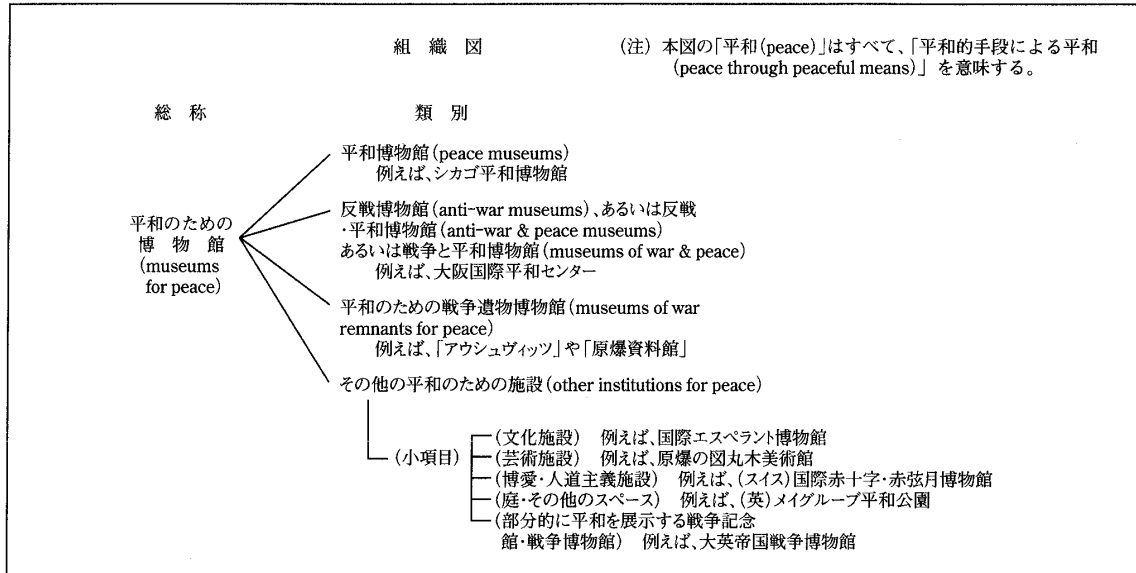
その日本の平和博物館を、なぜ、「平和博物館」とせず、「平和的手段による平和のための反戦博物館（ないしは反戦・平和博物館，ないしは戦争と平和博物館）」という類別項目に入れたのか。理由は、一にも二にも各館の展示の実態にある。大阪国際平和センターの「設置理念（ピースおおさか綴じ込みファイル，1990年9月17日）」の言葉：「人類共通の願いである恒久平和は、戦争の惨禍を知る世界中のあらゆる地域の人々が、それぞれの体験を伝え合い、語り続けることによって達成されます…」が示すように、日本の平和博物館の展示は圧倒的に「戦争」で^{注26)}、「平和」の部分は「平和コーナー」などの形であるにはあっても主ではない。この戦争展示を、1925年世界で初めて作られた(独)国際反戦博物館（独 *Internationales Anti-Kriegsmuseum*；英 *International Anti-War Museum*）^{注27)}やその前の1902年に世界で初めて建られた(スイス)国際戦争と平和博物館（独 *Internationales Kriegs-und Friedensmuseum, Luzern*；英 *International Museum of War and Peace, Lucerne*）^{注28)}と同じように、平和的手段による平

和の啓蒙のために使っているのが日本の平和博物館なのである。そしてこのことは、上記国際反戦博物館や国際戦争と平和博物館を始め世界の平和博物館を調査・探究し、第1回および第2回の平和博物館国際会議の良き組織者であった(英)ブラッドフォード大学平和学部助教授 ピーター ヴァン デン ダンガン Dr Peter van den Dungen にも、その「日本の平和博物館印象記(原題: Peace Museums & Peace Education: Impressions of a Study Tour of Japanese Peace Museums)」の中で、「日本の平和教育と同じように、日本の平和博物館においては、(平和のために、筆者)継承されるべき最も重要な知識は戦争(特に核戦争)の恐怖であったようだ(原文: It seems that in Japanese peace museums, as in Japanese peace education generally, the crucial knowledge to be transmitted has been held to be the horror of war (especially of atomic war), p.12)」という言葉で共有されているのである^{注29)}。日本の平和博物館の主なる展示は、類別項目「平和博物館」の欧米の平和博物館のそれとは違うのである。そして来館者は、この違いを見ている。立命館大学国際平和ミュージアムを訪れたアメリカの女性高校教師が、同館の展示資料、統計、模型、オーディオ・ビデオから戦争の原因、悲劇、責任そして明日への希望を見たと言った後で、こう付け加えている—「私は日本語は分からないけれど、特に子供向けの反戦アニメが良かった。できるなら、最近の平和創造の努力についても情報が欲しい(『立命館大学国際ミュージアムだより』, VOL.5-2, 1997.12.15, p.16; 原文(一部): I loved the children's anti-war animation although I don't speak Japanese. I would also like more information [on 筆者補足] current peace-making efforts.)」。1981年立のシカゴ平和博物館などを視察し、1983年に平和博物館を創る会を結成した人々^{注30)}は、「いわゆる戦争と平和に関する…施設(下線筆者)」と定義しながら、団体名を「戦争と平和博物館を創る会(下線筆者)」とはしなかった。そして1990年代、平和博物館ブームがやってきて^{注31)}、「平和博物館」は、ちょうど、戦争を語ることを平和講演と言ひ、戦争の話を祖父母から聞かせるのを子供たちへの平和教育と言ってきたように、戦争を展示する博物館となってしまったのである。筆者も、こうした日本人の一般通念に基づいて1992年の第1回平和博物館国際会議で「日本の平和博物館—その数、来館者数そして種類(英題: Peace Museums in Japan: Numbers, Visitors & Types (注3参照))」と題する報告をしてしまった。今私達日本人は、平和博物館を、それを最初に使い、それに固有の概念を織り込んだ欧米の人々に返すべき時にいる。私達日本人の「平和博物館」は、「平和的手段による平和の啓蒙のための反戦博物館(ないしは反戦・平和博物館、ないしは戦争と平和博物館)」なのである。

では、運動の総称—類別項目—小項目という組織図を作る上で、総称をどうするか。現在、総称は平和博物館である。これは、欧米の平和博物館の類別項目「平和博物館」と同一であり、外部者の誤解の元となる。筆者は、総称を「平和手段による平和のための博物館(museums for peace)」とすることを提起したい。思えば、第1回平和博物館国際会議を主催した ギブ ピース Give Peace ア チャンス A Chance の運動スローガンも、peace museum(平和博物館)にするか anti-war museum (反戦博物館)にするかはまだ決まっていなかったけれど、とにかく、「英国に平和のための博物館を！

(Towards A Museum For Peace In The United Kingdom)」であつたし、そのスローガンは *Bringing Peace To People* の見開きに大きく刻字されている。日本の博物館名称によくある「平和祈念…」は、「平和のための（英語では、for peace）」と解釈して間違いはなかろう。各地で催されている「平和のための戦争展」なども、この提起を支えてくれるであろう。

最後に、本稿が提起する総称—類別項目—小項目の組織図を示すと、こうなる：



おわりに

平和のための博物館の定義と類別化が合意されれば、次はいよいよ、「平和博物館国際会議」改め平和のための博物館国際会議の規約作成に取り掛かれる。規約には、参加ないし加盟の資格要件が明記されることであろう。そしてそれに合わせて、より多くの博物館—中には「第2回平和博物館国際会議」に招かれ報告だけして帰った(オーストリア)フランツ イェガステターハウス (独 Franz Jägerstätter House, 1993年立; *Peace Museums Worldwide*, p.10参照)のように、本当に小さい、田舎の農家を改築して作っただけの、しかし後に、(米)国防省職員だった ^{ダニエル エルズバーク} Daniel Ellsberg にベトナム戦争に関する同省機密書類 (俗に言う ^{ペンタゴン ペーパーズ} Pentagon Papers) を敢えて漏洩する大きな勇気を与えたという信念の参戦拒否者・反ナチ主義者フランツ イェガステター ^{注32)} の一部始終を集めた博物館もあろう—が、自分のアイデンティティを失うことなく、そして、自分がただの点としてだけではなく同類と共に線の上にいることを確認しながら、結集してくることであろう。同時にまた、規約に則って、新しい人々が平和のための博物館を創ることであろう。そうしてこそ、これまで平和のための博物館運動に取り組んできた真摯な人々の価値ある努力が武器による平和をとる者を突き崩し、具体的な形を伴った成果を生み出すのではないだろうか。その第一歩が平和のため博物館の定義と類別化の作業であると、1992年の「第1回平和博物館国際会議」から今日まで日本の「平和博物館」と外国の平和博物館の橋渡しを演じてきた筆者は強く思うのである。

注

- 1) 西田勝・平和研究室編, 1995, 日本図書センター：日本の20, 外国の28を紹介している。
- 2) 歴史教育者協議会編, 1995, 青木書店：平和博物館と戦争資料館の区別がつけづらいが総計日本の89, 外国の18を紹介している。
- 3) 1992.9.10-12, (英)公益団体(charity)The Give Peace A Chance(平和にチャンス)主催。主旨は, 主催者が将来平和博物館を作るに当たって, 既設の博物館から助言・経験を乞うというもの。参加者は, (米)シカゴ平和博物館(The Peace Museum, Chicago)など, 日, 独, 仏, ノルウェー, スイス, オーストリア, オーストラリアから約50人, うち20人が報告。日本からは(高知)平和資料館草の家・山根一代, 立命館大学国際平和ミュージアム・薬師寺公夫, 創価大学・高村忠成, そして筆者が報告。坪井主税「Peace Museums in Japan: Numbers, Visitors & Types」(札幌学院大学人文学紀要, 第52号, 1992年12月)参照。
- 4) Gerald Drewett, The Give Peace A Chance Trust, 20 The Drive, Hertford SG 14 3 DF, UK, 1993: 計50(国別内訳一日・米各10, 独7, 仏・オーストリア・ウズベキスタン各2, オーストラリア・デンマーク・北アイルランド・スイス・ブラジル・ロシア各1, 関連施設としてホロコースト5, ガンジー6)を紹介している。
- 5) League of Nations Archives, UN Library, CH-1211 Geneva 10, Switzerland, 1995: プロジェクト進行中のものを含めて計50(国別内訳一日15, 独7, オーストリア・米各4, 英・スイス各3, 仏・ウズベキスタン各2, 北アイルランド・オーストラリア各1)が紹介されている。
- 6) 例えば, 同館ガイドブック *The new Imperial War Museum 1990* (Lambeth Road, London, SE 1 6 HZ, UK)をみれば, よく分かるであろう。
- 7) 例えば, 第1回平和博物館国際会議のまとめ講演をした英国人平和学研究者(現(米)コルゲート大学教授 Dr Nigel Young は, “in part it (i.e., the museum 筆者注) is a display of weapons, in part a glorification of the (mainly British) soldier, in part a revelation of the follies and horrors of war”(まとめのペーパー: The role of a peace museum in peace education, Sept. 9, 1992, p.5)。
- 8) 1995.8.16-20, 将来シュライニング城内に平和博物館を作ろうという同城内に本部を置くオーストリア平和・紛争解決研究所兼ヨーロッパ平和大学主催で開催された。日本の8館(第5福竜丸展示館, 原爆の図丸木美術館, 埼玉県平和資料館, 立命館大学国際平和ミュージアム, 広島平和記念資料館, 平和資料館草の家, 残り3館: 大阪国際平和センターはペーパー参加, 沖縄県立平和祈念資料館・地球市民かながわプラザ(仮称)は筆者の「On the War Dead's Memorial Peace Prayer Hall: 戦没者追悼平和祈念館について(札幌学院大学人文学紀要, 第58号, 1995年12月参照)」報告の中で紹介)からの参加者を筆頭に, 英, 米, 仏, 独, ノルウェー, スイス, オーストリア, イスラエル, 北アイルランドから約50人が参加。坪井主税「第2回平和博物館国際会議報告」『地球の一点から』(西田勝・平和研究室, 第83, 84, 85, 86, 87, 88号)参照。
- 9) 第2回は第1回と違い, 公式のテープ・報告書がない。会議における筆者のメモによる。
- 10) 事務局長(英)ブラッドフォード大学の Dr Peter van den Dungen, 日本担当委員に立命館大学国際平和ミュージアム館長・安斎育郎, ヨーロッパ担当委員に(仏)ヴェルダン平和・自由・人権センター館長・Denis Marechal とジュネーブ国連の国際連盟公文書図書館(通称国際連盟博物館)の Ursula-Maria Ruser, アメリカ担当委員にコルゲート大学平和学部の Dr Nigel Young と剣を鋏へ平和センターの Ruth Usher が任命された。同事務局機関誌 International Network of Peace Museums Newsletter, no 5, Dec.1995 参照。
- 11) 上記機関誌, no 8, Dec.1997。
- 12) 『平和博物館を考える』(平和博物館を創る会・編, 平和アトリエ, 1994) p.67。
- 13) Bjerstedt, Åke. *Education and Debate*, No.102, p.51. School of Education, Box 23501, S-20045 Malmö, Sweden.
- 14) 第2回平和博物館国際会議の英文プレゼンテーション ペーパー(typed), 引用文はその後に出た「(参考資料) 平和博物館の定義を巡って」から。
- 15) 1994年9月, 館相互の事業に関する協議や協力を進めてことを目的として創設された機関(「立命館大学

- 国際平和ミュージアムだより」Vol.2-1, 1995/1/20から)。
- 16) 例えば, Gaston Bouthoul (*LA PAIX*, 1974; 邦訳『平和の構造』(中原喜一郎訳), 白水社, 1978年1月, pp.33-34) の定義: 「主権つまり政治的自主性を有する人間集団が, その死亡率のなかに組織され指揮された集団的殺人を含んでいない状態」。「平和は, 戦争と同じく, (完全な測定と計算が可能な)一つの社会事象である」もある。
 - 17) *Friedensmuseum katalog* 1987: Thomas Wechs jun., Lindenhofweg 25, 8990 Lindau am Bodensee, Germany. ガンジー, 英国で奴隷売買禁止法を作ったウィルバーフォース, シュバイツァー, マリア テレサ, 設立者が敬虔なカトリック教徒のせい, 歴代ローマ法王などが紹介されている。
 - 18) 第1回平和博物館国際会議時の Peace Museum Lindau と題するプレゼンテーションペーパー (typed)。
 - 19) 同上 The Peace Museum 'Bridge At Remagen' と題する設立者 Hans Peter Kurten のプレゼンテーションペーパー (typed)。
 - 20) 第1回平和博物館国際会議時の前館長 Marianne Philbin の The Peace Museum, Chicago と題するプレゼンテーションペーパー (typed)。本文は次の部分に基づいている: since the world is filled with war memorials and war museums, celebrations of historic battles and heroic militarists, why not a museum that celebrates peace?
 - 21) 同上プレゼンテーションペーパーからの引用。
 - 22) PEACECENTRE (Give Peace A Chance の機関誌), Annual Report 1996.
 - 23) *City of Peace Bradford's Story* (Edited by Carol Rank): Central Library, Prince's Way, Bradford, West Yorkshire BD1 1NN, UK.
 - 24) 注7に同じ。原文: There was further consensus that any Peace Museum in England or Austria, or wherever, should not be a War Museum (or "Horrors of War" exhibit) nor an anti-war museum in a simple sense, but something that transcends these antitheses.
 - 25) 展示担当者 Suzanne Bardgett の報告, 前掲 *Bringing Peace To People*, p.21に要約されている。同氏はまた, ロンドンの博物館学会誌 *Museums Journal* (42 Clerkenwell Close, London, EC1R 0PA, UK; 1997年1月号, p.22) で同主旨のことを述べている。
 - 26) 立命館大学国際平和ミュージアムの場合は90%が戦争展示であると同館館長安斎育郎が注4のペーパーで述べている。
 - 27) (独)エルンスト フリードリッヒ(Ernst Friedrich)がベルリンに作った博物館。後, ナチス突撃隊によって破壊された。坪井主税・ピーター バン デン ダンジェン編訳『戦争に反対する戦争』(龍溪書舎, 1988) 参照。
 - 28) (ポーランド)ジャン デ ブロッホ (Jean de Bloch)がスイス・ルサーンに作った博物館。Van den Dungen, Peter. The International Museum of War and Peace at Lucerne in *Revue Suisse d'Histoire* Vol.31, 1981, Schwabe & CO AG, Verlag, Basel, pp.185-202参照。
 - 29) 1994年春の同氏の来日渡航費用を補助した The Daiwa Anglo-Japanese Foundation(London)と The Japan Foundation Endowment Committee(Sheffield)に対する同氏の報告書。
 - 30) 第1回平和博物館国際会議にペーパー参加した Tsutomu Iwakura: Profile of the Japan Peace Museum (typed)によって, 「会」を結成する前にシカゴ平和博物館を視察していたことが判明。
 - 31) 例えば岩垂弘「日本の平和博物館の動向とその役割」『月刊社会教育(1994年3月号)』は, 「ブーム」という表現を使っている。
 - 32) Daniel Ellsberg に影響をあたえた Frantz Jägerstatter に関する記述は, Bruce Kent の記事 The man who said no to Hitler (in *New Statesman & Society*, 6 May 1994, UK) に基づいている。

(つばい ちから 本学人文学部教授 平和学専攻)